

金光新聞

2022
令和4年 6/8こんこうしんぶん 第1344号
毎月第2、4水曜日発行(年24回)

読者のひろば	23
わたしの助かり「みんなに真心をもらって」	4
好きになった人は金光教	5
あの時の記事/平成4年6月28日号から	5
金光教学院/本科入学式	6
教学研究所/研究生入所式	7

 フラッシュナウ

足し合ひ助け合う働きを現す

平和ならざる今こそ「世界真の平和」を考える

教祖金光大神が明治元年に、神様から「天下太平、諸国成就祈念、總氏子身上安全」と染めた幟を立て、日々祈念するよう、お知らせを受けてから154年。この地球上ではいまだ戦争や紛争が絶えることがない。金光大神は、参つてくる人々に人間が抱え持つ難儀性に目を向けるよう促した。それと同時に、「神の氏子」という人間観も示した。それらのことから「世界真の平和」について考えてみたい。

辻井篤生（金光教東京学生寮監修／和歌山県勝浦教会）

新型コロナウイルス感染症の終息が見通せず、気候変動への対応が待ったなしの状況下、今年2月24日、ロシア軍がウクライナへ侵攻した。東西冷戦が終結し、国家間の直接的な戦争はもう起ころないといわれていたが、無残にも裏切られた。それも国連の安全保障理事会の一つが公然と国際ルールを破つたのだ。

到底許されるものではなく、多くの死者と戦災者がいる現状に、一日でも早い和平を祈らずにはいられない。戦争や紛争に複雑さがあるとすれば、自國や民族、集團の正当性を主張し、自らを守り、間違っている現状を正そうとする政治的行為として武力を行使するからだ。そこには、地政学的な事情とともに、ある種の正義感や理想、同胞愛といったものがあるだろう。

私がご用する金光教東京学生寮では、日本人学生と中国や韓国などからの留学生が共に生活を送っている。以前、寮内で交流会を行つた際、話題が領土問題に及び、ある学生同士が互いの歴史的正當性を主張し合い、大激論となつたことがある。その場はどうに

根底のゆがんだ使命感が暴力に

か收めることができたが、私はその時、二人の心に「間違っている

か收めることができたが、私はその時、二人の心に「間違っている

互いを大事に、分断から共生へ

金光大神の元に参つた多くの人々は、いま出合つてゐる難儀な事柄をどうにかしてほしいと願い出たが、金光大神が教え示したのは人間そのものの難儀性だった。人々はそれに気付くことで、難儀を巡るとらわれから解き放たれ難儀に向き合つていく力を与えられたのである。

自らも他者も、与えられ生かされている命だからこそ、互いの存在を大事にし合つていくことができる。そこから、憎悪が憎悪を呼ぶ負の連鎖を断ち切り、分断から共生へ、分け隔てなく世界真の平和を分かち合つていくことができるのでないだろうか。

一方で現実は厳しい。しかし、世界のどの国にも、どの宗教にも、同じく平和を求める、世界真の平和への祈りを共有してくれる人がいる。その人たちと手を取り合つて、いくために、私たち金光教信奉者は日々、世界真の平和を真剣に祈り、金光大神の信心を天が下の一人一人に伝えていくことが大切になるのだと思つていて。

金光大神は、人間を「難儀な氏子」と呼び、それと同時に「天が下の者はみな、天地の神様の氏子

あなたのためを思つて正してあげる」という、ゆがんだ使命感のようなものを見た思いがした。

人は、自ら正しいと信じていることをもつて、相手を責め傷つけてしまうことがある。個々の立場では正しく思えることも、より広範で多面的な場面では悪になることは、よくあることだ。その極端な例が、コロナ下の「自肃警察」やネット上の「炎上」と呼ばれる現象などだろう。



大きいなる天地に生かされる人間として
すべてのいのちを認め、尊び
神と人、人と人、人と万物が
あいよかけよで共に生きる世界を実現する

購読料/1年分送料込みで1部5000円 2部以上1部につき4500円

*郵便振替口座 01230-3-1583番

発行/金光財団 金光教徒社事業部

TEL 0865-42-2037 FAX 0865-42-5087
HP <http://konkozaidan.jp/kyotosya/>

金光新聞の内容へのお問い合わせは、こちら

編集/金光教本部教序 金光新聞編集室
TEL 0865-42-7072 FAX 0865-42-9021

金光教
宣言